

〔新刊紹介〕

以倉絃平監修、苗村吉昭・外村彰編

『大野新全詩集』

外村 彰

大野新（一九二八～二〇一〇）は現在の韓国全羅北道群山市に生まれた。敗戦後遠戚を頼って滋賀県守山市に移住ののち旧制高知高校を卒業したが、京都大法学部在学中に結核に罹り、二十代の大半を信楽の療養所に暮らした。療養所では三度の胸部成形手術、また開腹手術を経験し、多くの仲間

の死を見つめて過ごす。その頃から近江詩人会に属し、退所後は京都の詩人が経営する印刷所に就職。滋賀と京都を拠点に詩人としての活躍を続けた。

大野の詩は生の中に潜む死の相貌を暗喩的に表現することで、人間の命を凝視し、その実存のありかを問う。慧眼の批評家でもあり、天野忠論や石原吉郎論なども書いた。京都で詩誌『ノッポとチビ』を刊行したことも知られる。代表詩集『家』でH詩賞を受賞した時、すでに五十歳であつ

た。三年後に長男が二十歳で事故死し、晩年は幾度か脑梗塞で倒れたが、長く近江詩人会の会計や代表を務め、同会の精神的支柱といふ存在であつた。

さてそんな大野新の歿後一周年を機に、かつて編者を務めた『滋賀近代文学事典』（和泉書院）での項目執筆が縁となり、大野から詩を親しく教わつた詩人・苗村吉昭氏と共に、全詩集を編むことになつた。監修者の以倉絃平氏は大野の詩友である。短歌を『歩道』誌から搜したり、京都や滋賀の地方新聞から詩文を見出したりしていたわたしは、それらを整理するかたちで主に年譜の作成を担当した。

本書には生前に刊行された詩集『階段』『粟の光り』『犬』『家』『続・家』『乾季のおわり』、それらに倍する量の詩集未収録作品、そのほか寮歌や短歌に放送用詩劇

「黙契」を収めてある。さらに清水哲男はか八名の執筆したエッセイが載つた『大野新全詩集 葉』を併収。

数年後に、可能であるならば散文を併せた『大野新全集』も刊行したいと考えている。

以下は個人的な感慨になるが、本書に関われたのは『滋賀近代文学事典』での執筆調査によるものであつた。これまで井上多喜三郎、伊藤茂次、高祖保の本を上梓してきたのも、平成二十四年に『もくはんのうた 高橋輝雄作品集』を出版（龜鳴屋、限定本）できたのも、みな『滋賀近代文学事典』との所縁からである。めぐりあわせの不思議——ないしは「縁（えにし）」というものの不思議さに、思い至らずにはいられない。

（砂子屋書房、二〇一一年六月、五七五頁、本体価格八〇〇円）

（とのむら・あきら 呉工業高等専門学校 准教授）